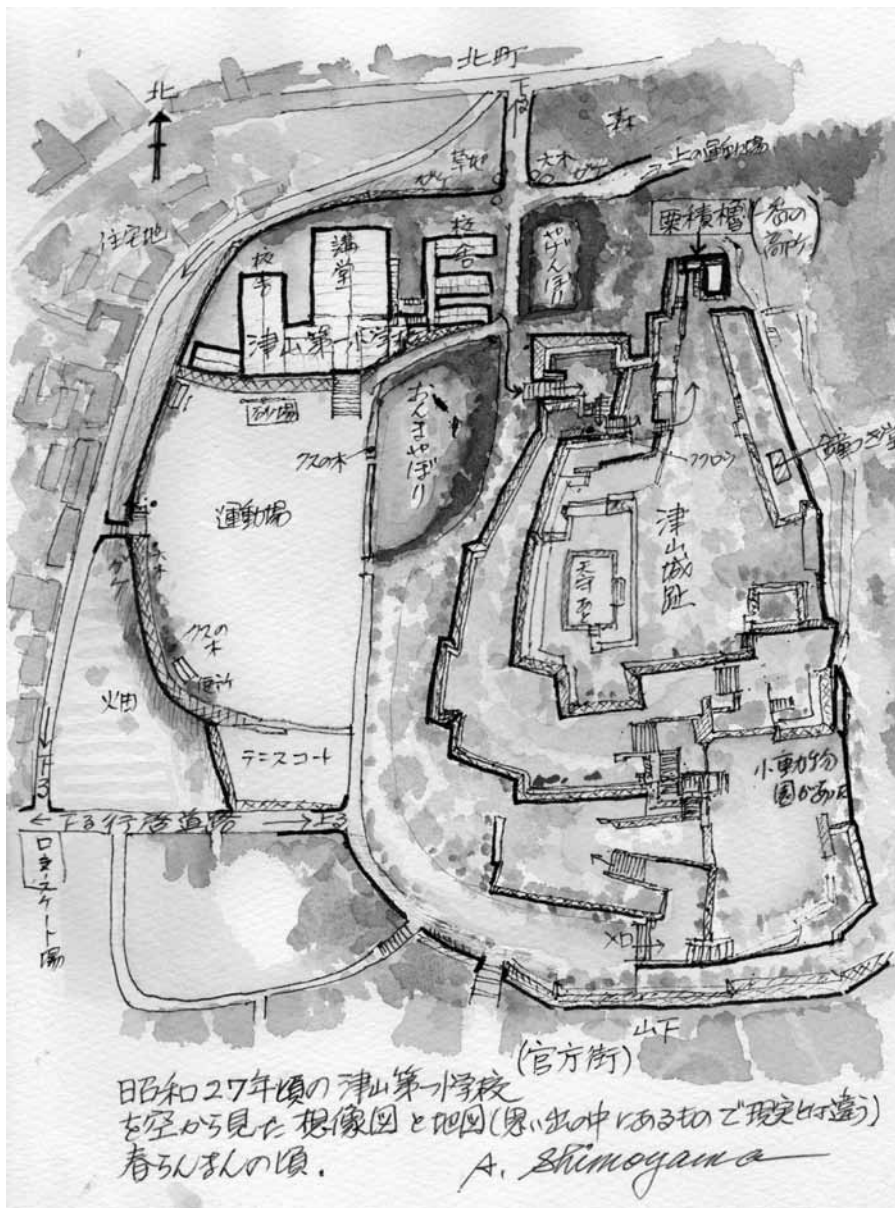


那岐山や泉山を背景に、空から風となって見下ろすと、津山盆地の真ん中に石垣が何層も積み重なった津山城址が見えてきます。城址の石垣は南側より北に行くほど次第に高くなり、その最北端には粟積櫓が最も空高くそびえています。小学校、高校時代のヒリヒリする思い出を、軽やかに天空に載せている粟積櫓の北側には、急峻な石垣が優美に（同時に威圧するように）、直角に近い角度で三〇メートルほど下へ伸びていき、下の段へと続きます。そのまた下は桜の木と様々な樹が混在する森となります。

手すりのないこの石垣の北側下を覗くと、天空に身を投げ出す感覚とともに恐怖心が湧きますが、男の子にとっては絶好の肝試しの場所でした。この櫓の石積の最北端の大きな石の上で逆立ちができるかどうか、あるとき三人の少年が試みました。老年になってから、そのとき一緒にいた友達にこのことを聞きましたところ、二人とも「記憶がない」とのことでした。私もはっきり覚えていませんが、あときは石垣の端で両手をついたとき、つい崖下を覗いておじてしまい、私だけは石垣から少し離れた地面で逆立ちをしました。地獄を覗くことにはならず、地面だけが見えました。意気地のない私を除いて、二人は後に実業家となり、名を成しました。



この櫓は、春には桜吹雪が下の段から舞い上がってくる秘密の天国となります。その石垣の北西側で、もう四段下にある石垣の上から山裾にかけて、かつて明治時代に建てられた木造の古い津山第一小学校がありました。それぞれの校舎は高低差があり、石段で繋がり、複雑な構造をし、西校舎からは津山の町が見下ろせ、北校舎からは中国山脈の白峰が見渡せ、そして城址はすぐ上にそびえています。桜吹雪が教室に吹き込んでいました。

周囲には桜木の群落と、楠や椿の大木や椎の木も生い茂り、その森の中に薄暗い葉研濠と御厩濠があり、その御厩濠西側に校庭があります。

給食後、昼休みになると、冒険好きの子供たちが、学校のすぐ傍の急峻な石段を何層もくねくねと駆け登り、秘密の隠れ家のような櫓跡にたどりつきます。ここは櫓の段で、楓の木が多く、昼なお暗い場所です。そこには



大きなフクロウがいるのです。目の前の枝にとまり、全く身動きせず、半眼で私の眼を見つめていて、一メートル離れた距離でどちらも動けません。何も言えません。山と森の主です。

放課後、校庭の北側の砂場に、いがぐり頭の、痩せた、五年生の少年たちが現れてきました。その中に私の貧相な姿も見えます。そこで子供たちは相撲をとりはじめます。転校生が新しくやってくるときには、私たちは未知の少年の力量を測るために、いつも相撲をとることにしていました。昨日転校してきた少年は松葉杖をつき、生まれたときから左下肢が不自由なのです。細身の体で、杖がないと右下肢のみでケンケンをして移動する状態です。

「こりゃー、本気でやったらいけんなー。手加減をしないと」と、私はつぶやきます。

「おい、杖がなくても相撲をとれるか」と私が呼びかけて誘うと、彼は「よっしゃー、やるぞ」と応じ、砂場の周囲にいる皆はゴクリと固唾を呑みます。

片足ながら、動きは俊敏。組んでしまうと、右下肢から腰の力が実に強い。私の得意の投げ技を巧みにかわし、技がなかなか決まらない。私はこんなはずではない、と焦った。技がついに決まったと思っても粘り強い。強靱な全身の筋力が伝わってくる。腕力と右脚の筋力は私の二倍はある。お互いに全力を出し尽くし、最後は同体で倒れ込んだ。砂でまみれた顔を拭くと、笑顔。

私は彼を仲間として認めました。ガキ連中も「お前は強いな」と、彼を尊敬の念で見えるようになった瞬間です。彼は負けず嫌いで、自分の不自由な体を憐れみの目で見てほしくない、というメッセージを全身で表現していました。

彼は一年後、他の町へ転校していききましたが、事情は知りません。名前は、誰であったか、忘れてしまいました。あの粘り腰があれば、きっとどこかで活躍しているはずですよ。

その運動場の傍、御厩濠には体長五〇センチを超える、黒色の二匹の鯉が悠然と泳いでいました。子供たちは、江戸時代より、その池の主が棲み着いているのかもしれないと噂し、樟くすのきの木の下に座り、鯉がゆったり泳ぐのを眺めます。春にはたくさんの稚魚が生まれ、濠の岸沿いに無数の群れとなって泳いでいるのを見て楽しめます。その魚は決して獲ってはいけないものだったのです。

江戸時代以前は、お城山全体は小高い山でした。そこに石垣や城郭を造ったのですが、北側と東側に森が残りました。その北側の森と城山から湧きだした水を貯めた、二つの濠(直径五〇メートルの円形の池)が作られました。少し高い場所には、深い森に囲まれ薄暗くて不気味な、垂直な崖に囲まれ、立ち入ることが禁止されていた神秘的な薬研濠があり、その下にある御厩濠へと

水が流れ込んでいました。御厩濠からは溝へと少量の溢水いっすいが常に流れ出ていましたが、命名のとおり、その溢水場で馬を洗うための池だったようです。

大鯉は、運動場の対岸にある森の緑の枝が差し出した暗い緑陰にいるのを好み、時折、誰かが餌やりをするのか、運動場側の岸に悠然と泳いできます。いわば、池の主です。子供たちはその鯉を大切に見守ってきました。

地球温暖化のため、今では想像もつかないでしょうが、七十年ほど昔の冬は寒さが厳しかったのです。冬、一晩のうちに十五〜三〇センチの積雪があるのが普通で、そのような日は午前中の授業はなくなり、坂道でそり遊びや竹スキーをして大喜びで遊んだものです。そして霜焼けで苦しみました。

氷点下十度の低温が数日続くと、御厩濠の水面は厚い氷で覆われてしまいます。私は氷の厚さを測るため、おそるおそる氷の上にゴム草履をはいた足を乗せ、割れないかどうか確かめました。大丈夫かな、五センチほどの厚さがあり、乗っかっても大丈夫のようです。滑って転ばないよう用心をして、そっと歩き、濠の真ん中あたりになると「ミシミシ」と音がするので、そこで足を止めました。透き通った氷の真下の足元を見ると、二匹の鯉が氷下に閉じ込められ、低温のため泳げなくなり、動かず、えら呼吸だけをしていました。そのまま心を残して、そっと岸まで戻りました。